

昭和期のアメリカ文学研究におけるアメリカン・リアリズムの受容と ウィリアム・ディーン・ハウエルズ評価¹

吉田明代

1. ハウエルズのリアリズムとアメリカ文学史上の功績

William Dean Howells は 1861 年から 1864 年まで領事としてヴェニスに滞在中ヨーロッパのリアリズム文学に触れ、*Boston Advertiser* や *North Atlantic Review* などにリアリズムの手法を意識した旅日誌や随筆を送っていたが、小説家としてのスタイルを確立し本格的にそのリアリズム理論を実践するのは、1881 年に *Atlantic Monthly* を辞めて執筆に専念し始めてからのことである。そのメルクマールとなるのは 1882 年に発表された *A Modern Instance* であろう。この作品では離婚が扱われており、ここで Howells は、風俗やプライベートな人間関係の活写の中に、アメリカ社会の構造に対する洞察を含ませることによりかなりの程度成功している。そして 1885 年の *The Rise of Silas Lapham* ではアメリカの産業文明に対する批判の姿勢を見せはじめ、またちょうどこの頃に Lev Tolstoy の文学に深く感化されており、その後 *Annie Kilburn* (1888) や *A Hazard of New Fortune* (1890) など、社会主義的な思想を織り込んだ作品を書くようになっていく。その社会主義思想は、*A Traveler from Altruria* (1894) において明確な表現を与えられることとなる。ただし Howells のリアリズムにおいては“common”が鍵概念として重視されるため、彼の作品においてはその産業文明批判も社会主義思想も、当時のアメリカにあって最も common であるとみなされた中産階級の経験との関わりにおいて、感傷や誇張を排した常識的な（すなわち、common sense を通した）ナラティブによって示唆される。

Howells の文学史上における功績は、まずアメリカで初めて本格的なリアリズム運動を理論と実践の両面で押し進めた点にある。そしてヨーロッパのリアリズムおよび自然主義文学を積極的にアメリカに紹介したこと、アメリカ国内では同世代の Mark Twain や Henry James のみならず、若い世代の作家たち（Hamlin Garland, Stephen Crane, Frank Norris など）の才能を認め、彼らの文壇への進出を後押ししたことも、大きな功績である。日本のアメリカ文学研究において Howells のこうした功績は一応認められており、包括的にアメリカ文学史を扱う際にはまず言及されないことはないのだが、Howells の作品および文学論についての研究はきわめて手薄であり、代表作の翻訳さえされていない²。このように重要とみなされている作家でありながら、日本において専門研究、そして紹介が十分になされていないことは一考に値する現象であると言え

る。そこで本稿では、昭和期の日本のアメリカ文学研究においてアメリカン・リアリズム、および自然主義文学の受容がどのように変遷してきたかを概観しながら、Howells 評価に見られる、「重要視されていないながら研究・紹介されていない」という奇妙な現象が何に由来しているのかを探ってみたい。

2. 戦前のアメリカン・リアリズムの受容

日本においてアメリカ文学研究を、英文学研究から独立した形で本格的に行った最初の学者は、立教大学教授の高垣松雄（1890-1940）であるが、それ以前にも、ある程度文学史的な視点からアメリカ文学を紹介したものとして、浅野和三郎の『米国文学史』（明治41＝1908年）³、そして野口米次郎の『米国文学論』（大正14＝1925年）がある。浅野のアメリカ文学史にはJamesとHowellsが「写実派」に属する作家として挙げられており、Twainの名も言及されているが、その次の世代の自然主義作家については言及がない。他方で野口米次郎は、小説よりはEdgar Lee Masters, Carl Sandburg, Vachel Lindsayらシカゴの詩人たちの名を挙げ、いずれアメリカ文化およびアメリカ文学が太平洋岸まで普及する頃には、これら中西部の新現実主義（人生派）も行き詰まり、新自然主義がその行き詰まりを救うことになるのであろう、との予測を述べている。大正期の『英語青年』では、福原麟太郎がアメリカ文学の新しい流れとしてNorris, Crane, Theodore Dreiser, Sherwood Anderson, Sinclair Lewisらの存在を紹介しており、また高垣も大正後期からいくつか記事を寄せている⁴。

ともあれ、高垣の『アメリカ文学』（1927）が、日本における最初の本格的なアメリカ文学研究書となる。平石貴樹氏が指摘している通り、高垣の文学研究は「社会派」の傾向を強くもつ（平石 494）。それは、「文学の世界とは人間の経験の一切を含んでいる筈のものである」（高垣『アメリカ文学論』167）という思想を根拠とするのだが、平石氏も述べているように、そこには他にもいくつかの事情がある。ひとつにはアメリカ文学が、アメリカという国家の発展と緊密に結びつく形で発展してきたため、その文学そのものが社会派的な要素を多く備えていること——少なくとも、戦前のアメリカ文学研究者たちはそのようにアメリカ文学というものを捉えていたこと。そして、彼らの参照したVernon Louis ParringtonやVan Wyck Brooksらによる先行研究の基調が社会的であったことの影響もあった（平石494-495）。それゆえ、『アメリカ文学の歴史的背景』（1946）⁵においてなされているように、アメリカの歴史と社会・経済の発展の文脈の中にアメリカ文学の発展を位置づけるという手続きが、まず高垣の文学研究の基礎となっているように思われる。また高垣の立場は、「審美的価値判断」は社会意識から自立して成立するものではなく、むしろ社会意識が審美的価値観を作り出しているのであるから、文学研究が基準とする価値観は審美的判断よりも社会的判断に基づいたものであるべきだ、というものである。そこから、次の引用に見られるように、最もよく歴史ないし社会の現状を反映している文学、つまりは最もよく「大衆の声を代弁」

する文学に最大の価値を認めるという民主主義的な文学観が生まれてくる。

この立場からすれば、文学は歴史の段階に於て人類が此の世界に生きて何を思い、何を感じたかを物語る記録である。それは幾多の男女の人生に対する態度の徴証であり、内的の衝動と外的の制度の美と意義——あるいは醜と無意義なることに對する立証である。それはまた人類が環境と無窮に抗争する過程の解釈であるとも言える。抗争そのものは依然として継続しながら環境は変化してやまないものであって、文学はその変化を反映する——或時は直接的に、或時は象徴、幻想の形をとって反映する。併しいずれにせよ、それが詩であつても散文であつても、難局に面して混迷せる大衆の歴史的、経済的環境に対する態度を映し出していることに於て変りはないのである。（高垣『機械時代と文学』135-136）

そこで、高垣においてはある種のリアリズム文学が高く評価されることになる。例えば、Anderson や Lewis などの作品は、「アメリカ生活の狭陋さを批評し、指弾する努力」を表すものであり、「単にアメリカの田舎町の生活記録たるにとどまらず、アメリカ文明そのものの解剖と解せられる」（高垣『アメリカ文学』200）という点が評価される。ただし、Lewis はあまりに饒舌すぎ、あくまで社会諷刺家であつて真の社会批評家とは言いがたいという理由で、全体としては高い評価は与えられていない。また James や Edith Wharton のように、狭い範囲の社会を狭い範囲の読者に向けて描くタイプの作家も評価されていない。「[James の後期の作品：引用者注] に対する一般の批評は難解という一語に尽されるが、また極めて少数ではあるけれども、微細なる心理解剖にジェームズの理知の冴えと、芸術的鍛錬の厳さを見て随喜渴仰する人々がある。我々にしてみれば彼の作品の少部分を読んだだけで、彼の描く世界が我々の現に住む世界とあまりにかけ離れているのに不満を感じるのは事実である」（高垣『アメリカ文学』102）と述べられている通りである。総じて高垣は、アメリカ文学がもつ社会批評の深さ、広さ、そして切実さにその価値を見いだしていたのだと言える。

戦前の代表的なアメリカ文学研究者には、高垣松雄の他に佐久間原（1886-1945）があつた⁶。佐久間は、高垣に比べるとより思想的な面への関心が強く、また高垣がどちらかといえば過去のアメリカ文学の発展の歴史を正確に概観することに努めたのに対し、佐久間の関心は現在および将来のアメリカ文学のゆくえのほうにも向いていたようだ。『米国小説史』（1940）で佐久間は次のように述べている。

想うに今日のアメリカは、郷土的地方的な文学よりも、国家的運命に深き関心を持つ文学、現代生活に対して何等かの suggestion や interpretation を含む文学に、一層切実な要求を感ずるのであろう。[中略] 今日のアメリカ小説は現実主義の洗礼を受け、従来未だ嘗て見なかつた位の文学的自由を獲得し、大に誠実真摯にはなつたが、その代り、それ自身の秩序と形式を発見することが出来ず、暗

中模索をやっているかに見える。(48-49)

この引用で言及されている「今日のアメリカ小説」とは、いわゆる「失われた世代」以降の作家たちによる小説を指すわけであるが、それが「郷土的地方的」な枠から抜け出し国際的な広がりを見せるようになってきていること、そしてそれが従来のリアリズムおよび自然主義からも脱却しようと「暗中模索をやっている」ことをも直感的に捉え得ている。ただしこの「暗中模索」は、新しく興ってきた小説をどのように定義し分析すればよいのかを未だに見いだせていない、文学研究者自身の暗中模索でもあるのであって、例えば佐久間は Anderson と William Faulkner とを比べてこのように述べている。「フォークナーには、アンダソンに見る如き人間的な温かさは感じられない。自然主義があらゆるものを失った時、そこに彼の eccentric で brutal な realism が残ったと云ってよいかも知れない」(佐久間『米国小説史』44)。つまりここでは Faulkner の文学を、自然主義ないしリアリズムの延長以外のものとしてとらえる視点がまだ形成されていないのである。佐久間自身の言葉を使えば、この新しい文学の、未だかつてない自由と、従来とは異なる様相を呈した誠実真摯さとを説明するための秩序や形式が、まだ見いだされていない。それが発見されるには、戦後の大橋健三郎の登場をまたねばならない。

戦前には、斎藤勇(1887-1982)による『アメリカ文学史』が1941年に研究社より、そして翌1942年には『アメリカの国民性及び文学』が出版されている。このうち『アメリカの国民性及び文学』では、アメリカの社会および文学を特徴づける精神として、清教精神(Puritanism)、辺境開拓精神(Frontier Spirit)、そして能率(efficiency)を尊ぶ態度が挙げられ、「アメリカの国民性を知るための三冊」として、それぞれの精神を現したものと意図であろう、まず Nathaniel Hawthorne の *The Scarlet Letter*, 次に Twain の *Adventures of Huckleberry Fynn*, そして Sinclair Lewis の *Arrowsmith* が選ばれている。斎藤は Lewis を、現在の作家中最も広くかつ的確にアメリカ社会を描いている作家であると高く評価し、次のように述べる。

今日ここに彼を引き合いに出すのは彼が大家であるばかりではなく、アメリカを最もよく描いているからでもある。今の小説家中アメリカを我々に理解させるに適切な小説家は誰であるかと聞けば、多くの人がシンクレア・ルイスだというだろう。[中略] [Arrowsmith: 引用者注] はスケールが大きい。ほかの小説には地方的で、何となく小規模なものが多いけれども、その間にあって、これは地方的の局限を越えたアメリカ全体の描写だといってもよからう。ことにアメリカを動かしているような勢いのある人が描かれている。(斎藤 94)

先では、高垣松雄があまり Lewis を高く評価していなかったことを見たが、Lewis に関しては素直にその業績を認める者と、その文学者としての真価に懐疑的な者とに分かれていたようである。ともかくこの斎藤の評価にふれて思い起こされるのは、Lionel

TrillingがHowellsの*A Modern Instance*に対して次のように述べ、同じように「アメリカ社会的的確な描写」であるとの評価を与えていることである。

It is of course in his novels that Howells is at his best as a social witness, and he can be very good indeed. The reader who wants to test for himself what were in actual fact Howells's powers of social insight, which have for long been slighted in most accounts of them, might best read *A Modern Instance*, and he would do well to read it alongside so perceptive a work of modern sociology as David Riesman's *The Lonely Crowd*, for the two books address themselves to the same situation, a change in the American character, a debilitation of the American psychic tone, the diminution of moral tension. (Trilling 207)

大竹勝氏は、LewisがHowellsのリアリズムの流れを正当にくむ作家であること、そして両者の作風の類似性を考えると、Lewisがノーベル賞受賞式での挨拶でHowellsを揶揄して「牧師や老嬢の愛好する作家」と呼んでいることは皮肉であると述べているが（「William Dean HowellsとRealism」上37）、確かにLewisはアメリカ社会に対する視線に諷刺が利いているために一見ラディカルに感じられるだけであって、題材としてはごくプライベートな人間関係を取り上げながらそこにアメリカ社会の特定の構造を透かし見る手法といい、その社会的視野が中産階級の外までは実質的に広がっていない点、それがための限界もあるが、それゆえに「平均的」なアメリカ人の「平凡な」生活を活写し得ている点など、ただHowellsを少し反抗的にし、ひねくれさせただけと言ってもよいほど、その作風は本質的なところで似通っている。そして早くも1950年代になるとLewisも、「よき時代のよき作家」（杉木10）とみなされるようになってゆくのである。ともかく、Howellsの穏当なリアリズムの流れをくむLewisが、1942年当時の「今のアメリカ」を最もよく描いた作家としてこのように名指されるということは（これは単に斎藤の独自の価値観——平石氏によれば「紳士の過ぎ」る（497）——に基づく選択なのかもしれないが、それにしても）、アメリカン・リアリズムに対するひとつの見解を示していると言えるだろう。実際、Lewisのノーベル賞受賞をもって、アメリカのリアリズムが世界的に通用する価値を持つに至り一応の完成を見たとする論調が戦前には見られるのである。これに対し、戦後のアメリカ文学史の叙述においてリアリズムあるいは自然主義の完成者として前景化されてくるのは、Dreiserである。

3. 戦後のアメリカン・リアリズムの受容

関西学院大学教授であった志賀勝（1892-1955）は戦前から『アメリカ文芸思潮』（1939）を上梓するなど、すでにアメリカ文学研究の業績を残しているが、アメリカ文

学に関して独自の諸見解を打ち出すのは戦後であった。そのひとつは、終戦後間もない1947年に上梓された『アメリカ文学史』において、アメリカ文学の審美的価値はその「粗野美」にあると主張したこと。もうひとつは、『アメリカ文学現実主義時代』（1950）および『アメリカ文学の成長』（1954）において、アメリカ文学の発展をリアリズムの完成としてとらえる文学史的パースペクティヴを提示したことである。このふたつ目の点は、例えば1930年代の小説を評して、「20年代よりも質実なりアリズムの地盤に近づき、その構成に於ても立体的で、奥行ある形をとろうとするようになる」（志賀『現実主義時代』123）と述べていることから見て取れるが、次の引用では、文学がリアリズムの完成へと向かうことは、すなわち近代文学としての正しい成長であるとの見解をさらに明確に示している。

1930年代のアメリカ文学は〔中略〕単なる社会性の面だけでなく、このような烈しい時勢の打撃によって露呈された個人の人間性の面に於ても、それは従来のアメリカ文学にない深みと烈しさをもったものを示すことができた。アメリカン・リアリズムなるものは、この30年代を以て一つの完成に達したと見ることができよう。（志賀『現実主義時代』211）

アメリカ文学を、十九世紀後半から今日までたどってきた結果は、それが現実主義の発生から成熟への線に沿うものであることは明らかである。（同226）

アメリカの文学の場合の如く、文学が現実の社会生活から逃れ或は離れていた傾向の強かった場合に、その文学がその現実の中に入りこみ、社会生活と一体になって活動をするようになったということは、その文学としての大きな進歩である。文学はこの段階に達して後、はじめて正常な展開をすることができる。（同227-228）

そして『アメリカ文学の成長』では、「Howells, Garland, Norris, Crane, Londonら、1890年代に著しく動いてきたrealismの動向を、明瞭な成果にまで導いたものはTheodore Dreiserであった」（志賀205）と述べ、アメリカン・リアリズムの完成者としての地位を、LewisではなくDreiserに与えている。戦前の研究にも、アメリカ文学の発展はリアリズムないし自然主義の完成へと向かう流れの中に捉え得るという論調はあったが、それを「近代文学としての正しい成長」として明確に意味づけたのは、志賀が最初ではないかと思われる。だが、これは前述の佐久間も直面した問題だったが、1920年代以降のアメリカ文学に眼を向ければ、当然リアリズムあるいは自然主義という概念だけでは捉えられない要素が出てくることは言うまでもない。そのことをさすがに感じたのか、志賀も1956年の『アメリカ文学序説』では、「リアリズムの完成」という方向でアメリカ文学の成長を眺める視線を若干修正しようとしているようだ。というより、やはり佐久間と同様、20年代以降の小説を扱う際の手つきに、明らかに戸惑いが見えるのである。例えば志賀はSherwood Andersonについて、「現代のア

アメリカ文学を考える際に、Andersonこそはその展開の中心に位置しているものであり、現代アメリカ文学の重要な主題や特色は、彼の中に最もよくつかまれ、彼から若き世代へ波及している形になっているということである」(『アメリカ文学序説』139)と述べているが、果たしてそのAndersonが中心にいるという展開が、何の、いかなる展開なのかを捉えきっていないようである。そして結局は、Anderson, Ernest Hemingway, Faulkner, John Dos Passosらの文学を語るに当たっては、「リアリズムの完成」という枠組みをいったん取り払い、それを文体の新しさ、「個性」主義ならぬ「個人」主義、「性」描写の外面性(すなわち、デカダンスの欠如)、といったいくつかの特徴から捉えようとしている。そしてそれら新しい文学を含めたアメリカ文学は、「民主主義」という大きな概念から捉え直される。

アメリカ文学の外面性なるものを考えると、その関連は複雑であり、また混乱するものと感じられる。しかし問題の究極は民主主義ないし資本主義文化に於ける文学の立場にあると考えられる。

Democracy社会に於て、文学は作家の主体から社会生活の外面に向って引き寄せられる。そこにある政治と経済の強い関心と、そして物質的な生活の興味の側へ作家の注意は引かれる。そしてその生活は何よりも群集のものであり、作家は群集の一分子となる。

こうしてdemocracyの文学にあつては主体への深い掘り下げということはある得ない。文学が主体的なものであるだけ、democracyの文学ということは、それ自体言葉の矛盾だと考えられる。アメリカの文学が浅薄或は冗雑である如く考えられがちなのはここに原因する。[中略] そのような[democracyの：引用者注]社会の続く限り、アメリカの文学が文学として存在の価値をもつためには、進んでdemocracyの中から真実文学としての本質を吸いあげることではなくてはならぬ。即ち「Democracyの文学」として、そこに矛盾なき正当な価値をもつことである。(志賀『アメリカ文学序説』290-291)

議論としてはあまりに大局的かつ理想主義的に響くことは否めないが、「リアリズムの完成」という枠組みを放棄せざるを得なくなったときに、このように「民主主義」という概念が現われてきたところに志賀の抱いていた思想の本質が見える。この思想(あるいは民主主義に対する知的な期待)は、戦前生れのアメリカ文学研究者の仕事に共通して息づいているように思われる。

アメリカの近代文学の発展をリアリズムないし自然主義の完成としてとらえる視点は、「二十世紀初頭の米国小説界を概観するに当り、之れに自然主義という一つの尺度をあてがって見るのが至当である」(杉田=高垣「Carl Van Doren」14)、また「文芸上の自然主義の理論を検討することは近代文学の発達を理解せんとする者にとって緊要な課題である」(「フランク・ノリスの自然主義に就て」19)といった高垣の言葉から

分かるように、戦前の「社会派」の見方を継承したものだといえる。龍口直太郎（1903-1979）なども、やはり「アメリカ文学の成長＝リアリズムの発展」という見方をとり、1920年代以降のHemingway, Dos Passos, Faulknerらの文学をリアリズムという概念から説明しようとしている。Hemingwayについては、「彼が棹さした大きな流れというのは他でもないアメリカン・リアリズムであり、彼はこれをぎりぎりいっぱい結論まで押し進めていったのである」と述べ（龍口257）、Dos Passosは、社会的リアリズムと心理的リアリズムの総合を果たした作家であると解説される。そしてFaulknerは、「リアリズムを内面的に、異常な深度に掘り下げた作家」である（同264）。

だが戦後の幾人かの研究者は、先述した佐久間などよりもいっそう強く、20年代以降の文学を解釈する際に困惑し、リアリズムや自然主義という概念とは異なる、新たな解釈枠の必要に突き当たった。例えば細入藤太郎（1911-1993）は、Dreiserについては「アメリカで、かれほど注意深く物語を記録とし、読者に納得できるほどに社会の実相を把握している小説家はいない」（『アメリカ文学史』285）と自信を持って断定しているが、では、社会以外の実相を映し出す現代小説についてはいかに語れるかとなると、Faulknerを「自然主義作家」と呼びつつも、次の引用に見られるように、別の箇所ではFaulknerの自然主義という枠を超えた点を強調するなど、やはりこの作家の文学を理解するための有効な枠組みを見いだせないでいる。

すぐれた社会的記録だとかつてゾラが考えた実験的小説は、その種もほとんど尽きはてたといえるのが現状である。小説家が全体的に感ずるものを伝えるため、近來の小説は、空想、イマジエリー、象徴主義に向かう。小説の将来は、フォークナーの作品がもっともよく暗示しているようである。初期の自然主義作家たちが開拓した「客観的」および「科学的」態度は、さらに変化に富む、柔軟性の豊かな技法に、その進路を譲っているようである。（細入415）

そこで「リアリズム・自然主義」の枠組みから脱却し、1920年代以降、特に「失われた世代」以降の作家の文学を解釈するのに有効な概念をおそらく日本では初めて発見し、その文学の特質に迫ることに成功したのが大橋健三郎（1919-）である。まず大橋は、アメリカ自然主義の異端児と目されていたStephen Craneの特異性を理解することから、「現代アメリカ文学」に対する認識を深めたものと思われる。大橋によれば、Craneは「客観的に認識される「環境」ではなくて、人間が主体的に落ちこんでいる「状況」により深く関わったという点で（『アメリカ自然主義とステイーヴン・クレイン』37）、HowellsからDreiserに至るリアリズム・自然主義文学よりもいっそう現代的なのである。この論文が発表されたすぐ翌年の1958年には、Craneの文学をやはり「自然主義」という枠組みにとらわれずに解釈した松山信直による論文が発表されている。松山はCraneについて、社会的なテーマを「より人間的な面に於て考察しようと

する」傾向があり（「Stephen Craneの小説について」68）、例えば環境とモラルの関係をも心理的な現象として捉え、「環境そのものの盲目的な支配力ではなくて、支配される側の、限られたシチュエーションにおかれた人間そのもの」（同74）に関心を寄せる作家であると述べる。この「状況」あるいは「シチュエーション」という語の使用にはサルトルの実存主義哲学の影響も感じられるが、ともかくここに、アメリカの20世紀文学を語る新しい視点が確立していることは間違いない。

もう一つ、「社会派」の傾向が強かった戦前のアメリカ文学研究との違いは、文学の技巧について考える傾向が目立ってきたことである。細入も、「散文芸術家としてのフォークナーは、どの自然主義作家よりもしんげんに考察されるべきである。物語芸術の技巧的な問題に絶えず注意を怠らず、その解決に稀にみるすぐれた技量を示してきた」（『アメリカ文学史』412）というように、作家の「技巧」を問題とする傾向を見せている。大橋も、Hemingwayら現代アメリカの作家たちに19世紀以来のリアリズムの手法が影響しているのはもちろんだが、彼らの場合はその上に、アメリカ口語の語り口というTwain以来の伝統に、Jamesの心理描写や世紀末の象徴主義などの新たな技巧を取り入れ、芸術的な洗練を目指す姿勢が見られると述べ（大橋、斎藤『世界の文学史5』198）、純粋な「社会派」の読解以上のものを付け加えている。

大橋は、Dos Passos, James T. Farrell, Thomas Wolfe, Hemingway, Faulknerを中心に論じた『危機の文学』（1957）において本格的に1930年代のアメリカ文学と取り組み、そこで、「日常性」と「危機」、「芸術性」と「人生」の対立、そして「寓意」の文学の方法、といった概念を提示しており、これらの対立を止揚し「寓意」の文学の方法を取り入れて最も文学的完成に近づいた作家として、Faulknerを名指している。「このフォークナーの世界にいたって初めて、現代アメリカ文学における最も堅固、かつ実質的な地点にゆきあたったとってよかろう」（大橋『危機の文学』208）と述べられている通りである。リアリズムや自然主義の文学を「人生派」の文学と呼べるならば、大橋によって「芸術性」と「人生」が対等なものとして対置されているということは、自然主義は近現代文学全体を覆っているのではなく、見方によっては「審美主義」と対立するような一つの文学的手法であるというように、ここでははっきりと文学的手法としての自然主義が相対化されたということである。とはいえ、自然主義がはらむ「危機と日常性」、「社会と個人」といった問題は古くて新しい問題として現在に引き継がれていることにも、大橋はわたしたちの注意を向けている（『危機の文学』235）。そして大橋はこのように、「失われた世代」以降の作家たちはリアリズムや自然主義とは「まったく別個の文学伝統」につらなっているとも言えることを明らかにしながら（『アメリカ文学（1940年まで）概観』165）、しかし失われた世代もDreiserの世代も結局は同じもの、つまり「現代アメリカ産業文明機構」に振り回されたのであって、その二つの世代をつなぐのがAndersonであると述べており（同179）、広い意味での「社会派」の視野を失ってはいない。

ところで、高垣松雄の後継者で「社会派の確立者」（平石496）である西川正身

(1904-1988)は『アメリカ文学ノート』(1947)の中で、20世紀初頭のアメリカン・リアリズムおよび自然主義文学は日本で正しく受容されなかった、と嘆じている。というのも、一方では昭和初期の日本において同時代のアメリカの新興文学に対する関心は表面的なものにとどまり、「われわれの文学に、何ものかを与えることがなくて終わった」からであり(西川『ノート』139)、他方で「明治以来、アメリカの文人でわれわれに影響を与えたのは、ポー、エマソン、ホイットマン、それくらいでしかなかったのは、アメリカ文学そのものにも多少の原因はあろうが、それ以上に、われわれのアメリカ文学に対する理解が不足しているからである」(同141)と述べている。しかし、戦前から戦後の大橋健三郎までに至るアメリカ文学研究の軌跡をごく大雑把に辿ってきたわたしたちは、戦前はアメリカ文学の社会的な側面に関心が集中しすぎたきらいはあるにせよ、社会と分かちがたく結びついたものとしてアメリカ文学を捉え、アメリカ社会と共にその文学を理解しようと努めた先人たちの切実で真摯な姿勢に敬服せざるをえないし、「リアリズム・自然主義」の概念のみで新しいアメリカの文学をも解釈することの限界を見事に乗り越えた戦後の研究者たちの実力にも、敬意を払わざるを得ない。だがここでは特に、「社会派」の限界を乗り越えた大橋が、先にも述べたように、決して「社会派」の視野を放棄したわけではないということにわたしたちは注意すべきである。というのは、自然主義そしてリアリズムがはらむ、「危機と日常性」、「社会と個人」といった問題は、21世紀の現在でも「古くて新しい問題」としてわたしたちが抱えている問題だからだ。

4. 昭和期日本のアメリカ文学研究におけるハウエルズの評価と今後の課題

ではこれまで見てきたような研究史の流れの中で、Howellsはどのように評価されてきたのか。昭和期を通じてHowellsに対する批判は主に、リアリズムの理論を実作において徹底しなかったこと、あまりに上品な伝統にとらわれすぎていたこと、楽天的にすぎアメリカの暗黒面に対して眼を閉じたことなどに向けられる。反対に評価されているのは、初めてマルクス主義ないし社会主義に対し共感を示したアメリカ作家であったこと、後の世代の作家たちを認め後押ししたことである。しかし、概して戦前から戦後にかけての日本の研究者にとってHowellsは、「緊急性」を欠く作家だったようだ。Howellsの文学は、アメリカという国の本質を起源から知ろうとするには現代に近すぎ、アメリカの「現在」を語るには古すぎるという意味では非常に中途半端なものだった。他方アメリカ本国では、1920年代の作家や批評家たち(Sinclair LewisやH. L. Menckenなど)には、Howellsは流行おくれの作家、素朴で中途半端なリアリスト、あまりに微温的ななどの批判を受けるのであるが、同時代の批評家には、彼の小説はあまりに温かみがなさすぎると言われていた。渡辺利雄氏が言うように、「ハウエルズは、結局、過渡期の文学者で、前後の世代から挟み撃ちにあって攻撃される宿命にあった」(『19世紀アメリカ小説の展開』306)のだといえるが、日本においては逆に、Howells

をちょうど中心にして、研究者たちの関心はその前後に集中し、中心が空洞として残された形となった。

しかし、1950年代になってアメリカでHowellsについての伝記や研究書が続けて出版されたことを受けて、日本でも60年頃からHowells再評価の動きが生まれていたらしい⁷。西川も、Howellsは一流の作家ではないとはいえ、「それにしても、長篇の一冊や二冊は紹介されているのではないか」と述べている（「アメリカのリアリズム」51）。しかしこの動きも小さなものでしかなく、戦後のある時期からの文学研究自体が、佐伯彰一氏が「Mark Twainの場合」（1958）の中で指摘したように、一般に「暗さ」を好む傾向に支配されたために、「微温的」なHowellsは文学的に魅力のない作家として受け取られてきた。作家の「暗い」部分に関心が集まる傾向は、例えばTwainについて語る際にも、「粗野だが、健全な「西部」の民衆作家、楽天的なhumoristといったレッテルに人々は満足しない。その裏側に暗い芸術家的な苦悩を嗅ぎとろうとする」（佐伯251）といった態度を生む。そうした態度が「文学的」であるとすれば、「アメリカの作家は社会のほほえましい側面を描くのが正しい態度だ」⁸と述べたHowellsが作家としての「文学的」価値を認められないのは当然であろう。大竹氏も、Howellsの後の時代は、フロイトの精神分析学の影響もあり、「人生において、異常なもの、極端なものに注意を向け始めた」ため、時代の趨勢そのものがHowellsにとって不利に働いたことを指摘している（大竹 上38）。同時代の作家でもTwainやJamesは、ひとつにはその「暗さ」「異常さ」「極端さ」を取り出しやすいという点で、Howellsよりも研究対象として魅力を持つのであろう。

Howellsに関心を抱く読者は、おそらく作家の「暗さ」や「異常さ」に関心を抱くタイプの読者ではなく、作家が描く社会に関心を抱く読者、つまり、例の「社会派」タイプの読者であろう。だとすれば、Howellsが描いたのが19世紀後半のアメリカ社会である以上、当時の社会に対する関心が低下するにつれ、Howellsに対する関心も薄れるはずである。その意味では、19世紀後半に時代的に近い明治期のアメリカ文学史の記述に、「概括して言えば、かれ[Howells：引用者注]の小説は最も広く且つ最も深く米国の社会を描破せりと称すべきが如し」（浅野62）とあるのは興味深い事実であるし、「Howellsの現代性」について刈田元司氏が次のように述べて、やはりその社会性を重視していることにも理由がある。

個によって普遍を描こうという気構えが根底にあったために、彼の小説は技巧において写実的であるという以上に、時代と場所を十分描こうとした、すなわち19世紀末の一地方の生活を描きながら、より大きなアメリカ全体の世界における人間の条件の変化を示そうとした点に価値がある。そしてそこに彼の現代に通ずる意義もみとめることができるのである。（刈田136）

このように、ある時代のアメリカ社会を最もよく描いた作家であると評価される（ある

いはそのようにしか評価されない) 点は、かつて斎藤勇にアメリカ社会を理解するための三冊に選ばれたが、現在では研究されることの少なくなった Sinclair Lewis と同様である⁹。1938年に濱田政二郎は、Howells を「Franklin の系統をひいた純然たる philistine」(濱田 388) と呼び、この philistinism (俗物性) はアメリカ文学にとっては弱点でもあるけれども、philistinism の精神からこそ、アメリカ文学独自の美点も生まれ得るのだと述べている。Lewis などその点では philistine と呼ばれてよい作家であろう。そして「社会」とは、基本的に俗なものである。文学研究が社会の「凡俗さ」とどれだけつきあえるかという問題は、大橋の言う「危機と日常性」や「芸術と人生」の問題ともつながるものであるが、「社会派」の視野を失った文学研究は、おそらく社会生活の凡俗さを思い起こさせる文学には根気強くつきあってゆくことができないであろう。「われわれは現代アメリカ文学の特色の最後として、それが「社会的」であることを挙げねばならぬ。そしてこれは恐らくその最も顕著な特色であろう。元来アメリカ文学は、実践的な倫理的な一面を濃厚にもつものであって、そこに社会的背景を重視し、またそれに教訓的 (didactic) な意味を含めようとする傾向が生れる」(『アメリカ文学序説』204-205) と述べた志賀などは、アメリカ文学が持つ教訓性を含め、その凡俗さとも向き合った研究者であったように思われる。近年では珍しく Howells の重要性を公平に認めている渡辺氏が、Franklin についても強い関心を抱いて研究している事実をここで思い返してもよい。Howells について渡辺氏は、「彼はアメリカ文学の伝統の中に正しく位置づける必要のある文学者の一人である」(渡辺 306) と述べているが、この必要はいまだ十分に満たされているとは言えない。

しかし、philistinism を受け容れるかどうかはともかくとして、文学の「暗さ」や「異常さ」に関心が集まるとい現象は、20世紀における二つの世界大戦を経過した、「全人類的」な心理から不可避的に生じる結果なのとも言えよう。江藤淳は「1890年代の米国」(1965) という小文の中で、1890年代から第一次大戦前夜まで続くアメリカの文化的雰囲気をもよく体現する人物として、Howells を紹介している。Howells はその最晩年に第一次大戦を経験し 1920年まで生きてはいるが、「世界戦争」の傷を負って長くは生きてゆく必要のなかった、最後の世代の一人と言ってよいであろう。だからこそ彼は、江藤が言うように、晩年まで「楽天的」でいられたのだし、大戦の前夜までアメリカの未来への期待を語ることもできたのだ。江藤はこの小文を次のように締めくくっている。

だが、その未来はハウエルズの考えたようなかたちではついに米国に到来しなかった。第一次大戦がすべてを根こそぎにしたからである。やがて世界大戦と 1920年代がやって来る。ハウエルズは、ついにスコット・フィツジェラルドやヘミングウェイの文学を知ることなく、20年代の入り口で世を去ったのであった。(江藤 67)

この最後の一文はさりげないが、HowellsとF. Scott Fitzgerald, Hemingwayの世代間の断絶だけでなく、彼らの文学を読む、受け手側の断絶をも暗示しているように思われる。つまり、20世紀の二つの大戦が「進歩」や「理性」への信頼を根こそぎにした事実を知っているがゆえに、FitzgeraldやHemingwayの文学のほうにより多くの共感や関心を注がざるを得ない、「世界大戦後」を生きる世代に、Howellsの文学がアピールするのは難しいだろうということだ。

Howells研究の今後の課題としては、赤嶺健治氏が「日本におけるハウエルズ研究」(1980)において提示した課題がそのまま残されていると言ってよい。赤嶺氏は、Howellsの経済小説を含めた主要作品については、当時の社会や歴史など作品外の状況分析とも並行しながらさらに研究をすすめ、Howellsの評論を総合的に分析し、その文学論や社会主義思想の持つ意義を明らかにし、またアメリカン・リアリズムひいてはアメリカ文学全体の発達にHowellsが果たした役割をも明確にする必要があると述べている(赤嶺73-74)。最後の点は渡辺氏が提示した、「Howellsをアメリカ文学の伝統の中に正しく位置づける」という課題とも重なるのであるが、この課題を果たすためには、Howellsと「世界大戦以後」の文学とのつながりを発見することも必要であろう。世界大戦は確かに大きな歴史的事件ではあったが、それでも断絶されずに19世紀から続いている問題もあるはずである。それは、一言でいえば近代の日常性の明暗、という問題であるのかもしれない。

注

本文中および注において旧字旧仮名遣いの表記はすべて、新字新仮名に改めて引用・表記する。

1 本稿は、日本比較文学会東京支部例会(2008年7月19日、於日本大学法学部)における発表原稿をもとにしている。

2 唯一和訳されているHowellsの文章は、渡辺利雄訳「わがマーク・トウェイン」『世界批評大系 第四巻——小説と現実』篠田一士他編、筑摩書房、1975年、288-304頁である。

3 これは『英文学史』の付録として巻末に収められているものである。

4 高垣は1920年にシカゴ大学に留学、翌年中退帰国し、1925年に立教大学教授となる。『英語青年』などの雑誌には杉田未来のペンネームでも寄稿している。

5 出版されたのは高垣が既に故人となっていた戦後であるが、その内容は1931年から1933年にかけて『英語研究』で連載されたものである。

6 佐久間原は1907(明治40)年に早稲田大学英文科を卒業した後、1917(大正6)年に同大教授となるまでの間、通訳として8年間、関東都督府陸軍部に勤めていた。1934年に研究社から『アメリカ小説研究』を、戦中の1943年に『アメリカ文学とアメリカ心理』を上梓しているが、後者の「あとがき」では、「私見に依れば、過去半世紀に於けるアメリカ社会の現実は、建国以来のお題目たるデモクラシーの理想が、今日畢竟欺瞞に過ぎないことを明白に暴

露しているし、米国人の中世的なヒロイズムも、結局一種の虚勢的擬態に過ぎないと信ずべき理由がある」(268)と述べ、かなり軍国主義的な口吻で日本の勝利を願い、そのためには「吾国民が、この宿敵の性格と国民心理に対して正確な認識を持ち、冷静な判断を持つことが強く要請される」(269)と主張している。ところが、本文には「あとがき」に見られるようなアメリカに対する偏見が一切見られずあくまで客観的な叙述に徹しているから、この愛国的言辭はポーズなのかもしれぬ。当時のアメリカ文学研究者が感じていたに違いない惧れや緊張は戦後生まれの我々には想像を絶するものである。

⁷ 大竹勝「William Dean HowellsとRealism」、刈田元司「Howellsの現代性」を参照。

⁸ Howellsの文学を象徴するものとしてよく引き合いに出されるこの言葉は1888年9月号の“Editor's Study”に初出し、後にHarper'sに連載されたこのコラムを部分的に抜粋した*Criticism and Fiction* (1891)にも登場する。

⁹ 参考として、19世紀後半から20世紀初頭にかけての代表的なアメリカ・リアリズムおよび自然主義作家たちについての日本国内における研究論文本数の変遷(1945～2004年)を下の表にまとめた。データは『英米文学研究文献要覧』『外国文学研究文献要覧I 英米文学編』安藤勝編、日外アソシエーツに掲載された論文数による。表中カッコ内の数字は年間平均の論文本数を示す。

	Howells	Twain	James	Garland	Norris	Crane	Dreiser	Lewis
1945 ～1964	11 (0.55)	93 (4.65)	199 (9.95)	1 (0.05)	7 (0.35)	48 (2.4)	65 (3.25)	27 (1.35)
1965 ～1974	13 (1.3)	84 (8.4)	231 (23.1)	3 (0.3)	19 (1.9)	76 (7.6)	63 (6.3)	23 (2.3)
1975 ～1984	15 (1.5)	199 (19.9)	387 (38.7)	8 (0.8)	23 (2.3)	69 (6.9)	101 (10.1)	14 (1.4)
1985 ～1989	13 (2.6)	136 (27.2)	269 (53.8)	1 (0.2)	15 (3)	53 (10.6)	42 (8.4)	11 (2.2)
1990 ～1994	10 (2)	194 (38.8)	223 (44.6)	3 (0.6)	12 (2.4)	34 (6.8)	39 (7.8)	8 (1.6)
1995 ～1999	5 (1)	200 (40)	277 (55.4)	2 (0.4)	20 (4)	28 (5.6)	35 (7)	8 (1.6)
2000 ～2004	10 (2)	213 (42.6)	207 (41.4)	2 (0.4)	16 (3.2)	23 (4.6)	46 (9.2)	3 (0.6)

引用文献

赤嶺健治「日本におけるハウエルズ研究——概観と文献目録(1958～79)」『琉球大学語文学論集』25(1980年):63-85頁。

浅野和三郎『米國文學史』(『英文學史』付録)大日本図書、1908年。

- 江藤淳「1890年代の米国（下）——ウィリアム・ディーン・ハウエルズをめぐって」『学燈』
62.4（1965年4月）：64-67頁。
- 大竹勝「William Dean HowellsとRealism」上『米書だより』96（1961年3月）：36-40
頁；下 同97（1961年4月）：36-40頁。
- 大橋健三郎『危機の文学——アメリカ30年代の小説』南雲堂、1957年（改装版 1966年）。
——「アメリカ自然主義とステューヴン・クレイン——「環境」と「状況」」『英米研究』東京
外国語大学英米研究会 4（1957年）：35-39頁。
——「アメリカ文学（1940年まで）概観」『英米文学史講座』第10巻（20世紀1） 福原麟
太郎、西川正身監修、研究社、1960年。
- 大橋健三郎、斎藤光『世界の文学史5 アメリカの文学』明治書院、1967年。
- 刈田元司「Howellsの現代性」『英語青年』108.3（1962年3月1日）：136-138頁。
- 斎藤勇『アメリカの国民性及び文学』有斐閣、1942年。
- 佐伯彰一「Mark Twainの場合——Van Wyck Brooks, DeVoto, そして……」『英語青年』
104.5（1958年5月1日）：251-253頁。
- 佐久間原『米國小説史』研究社、1940年。
——『アメリカ文学とアメリカ心理』大観堂出版、1943年。
- 志賀勝『アメリカ文学現実主義時代』新英米文学語学講座18 研究社、1950年。
——『アメリカ文学の成長』研究社出版、1954年。
——『アメリカ文学序説』研究社出版、1956年。
- 杉木喬「シンクレア・ルイス」『学燈』48.3（1951年3月）：10-13頁。
- 杉田未来（＝高垣松雄）「Carl Van Doren：現代米國作家論（上）」『英語青年』49.1（1923
年4月1日）：14-15頁。
- 高垣松雄『アメリカ文学』研究社、1927年（増訂3版 1952年）。
——『機械時代と文学』研究社、1929年。
——「フランク・ノリスの自然主義に就て（承前）」『英語研究』26.12（1934年3月）：
1343-1345頁。
——『アメリカ文学論』研究社、1941年。
——『アメリカ文学の歴史的背景』文藝春秋新社、1946年。
- 龍口直太郎「ドライザー、ヘミングウェイその他」『英米作家論』英語・英米文学講座 第5
巻 龍口直太郎他著、河出書房、1952年。
- 西川正身『アメリカ文学ノート』文化書院、1947年。
——「アメリカのリアリズム——ハウエルズを中心に」『学燈』59.7（1962年7月）：48-51
頁。
- 野口米次郎『米國文学論』第一書房、1925年。
- 濱田政二郎「アメリカ文学に於ける Philistinism」『英文学研究』日本英文学会 18.3（1938
年7月）：376-398頁。
- 平石貴樹「歴史と文学のあいだには——日本におけるアメリカ文学史」『アメリカ』亀井俊介
監修、平石貴樹編 松柏社、2005年、483-512頁。
- 福原麟太郎「北米文学の昨日今日」『英語青年』46.3（1921年11月1日）：78頁。
- 細入藤太郎『アメリカ文学史』培風館、1960年。
- 松山信直「Stephen Craneの小説について——アメリカ・ナチュラリズムの側面」『人文学』

- 同志社大学人文学会 35 (1958年) : 59-110頁.
- 渡辺利雄「19世紀アメリカ小説の展開」『講座英米文学史9 (小説II)』朱牟田夏雄責任編集、大修館書店、1984年、271-387頁.
- Howells, William Dean. "Editor's Study," *Harper's Monthly* 73 (September 1886), 641.
- Trilling, Lionel. "William Dean Howells and the Roots of Modern Taste" (1951). In *The Moral Obligation to be Intelligent: Selected Essays*. New York: Farrar, Straus and Giroux, 2000, 203-223.